Center for Urban and Regional Studies ISSN 0913－7181(1)

CURES NEWSLETTER 地域経済ニューズレター

1997.10.25 No.44

巻頭言

地域研究の恐さとおもしろさ

鶴園　裕

『国民経済の黄昏』（宮崎義一）の時代に『カジノ資本主義』（スーザン・ストレインジ）が語られる今日、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（マックス・ウェーバー）を論じることは、いささかの時代錯誤を覚悟せざるを得ないかも知れない。しかし、周知のごとくウェーバーの著作は、ヨーロッパにおけるプロテスタントとカトリックの混住地域における信仰と職業の関係を社会学的に観察することから問題の提起を始めている。この問題提起の妥当性はともかく、ウェーバーの方法には地域の観察ということが深く関わっている。ある意味ではウェーバーの宗教社会学というものは、儒教論であれ、道教論であれ、当時のヨーロッパ人が持つ中国やアジアという「地域」のイメージと偏見抜きには成り立たないものであったろう。カジノ資本主義の今日、プロテスタンティズムの倫理をもつ地域にのみ資本主義が可能かと問われれば、北はロシアの資本主義から南は東南アジアの資本主義まで、あらゆる地域で資本主義は可能であると答えざるを得ない。またアジアの社会科学が、例えば中国では明代の儒教のある一派に勤勉や倹約を通した中

■ 巻頭言 ……鶴園　裕
■ CURES Report
「日本海シンポジウム―日本海の環境保全」内容報告と、
石川県及び政府の事故対策評価……宮崎悦子
■ CURES Salon
「イスラエルの言葉」……野村(中沢)真理
■ 地域経済文献情報

金沢大学経済学部

国資本主義の精神の萌芽を発見したり、韓国の歴史学者が17・8世紀の実学と呼ばれる朱子学とは異なる儒教に近代精神を発見したり、日本の安丸良夫が『日本の近代化と民衆思想』の中に「通俗道徳」と呼ばれる勤勉や倹約、孝行などを徳目とする精神が存在し、これらが日本の近代化を支えてきた事実を発見した基底には、ヨーロッパに学びつつ、自らの「地域」を拠点にしてヨーロッパ人のアジアという地域に対する偏見への学問的な反発があったように思える。これも広い意味では地域研究である。

ウェーバーの論敵にブレンターノという人がいた。ブレンターノには福田徳三という日本人の弟子がいて、この人は『日本における社会ならびに経済的進化』という本をドイツ語で書いて、1900年にシュットガルトで出版し、博士号を得た。この本は後に『日本経済史論』という名で弟子によって翻訳された。その要点は、「国の東西を論ぜず経済生活の発展の経路を等しくし、同一の社会上ならびに経済上の条件は亦、類似の制度を呼び起こすの理」(翻訳者坂西由蔵の識) を明らかにしたものである。要は日本史の発展と欧州経済史の発展に本質的な違いはないというナショナリズムの表現であった。この福田徳三が帰国後、1902年に朝鮮、シベリアに出張し、2カ月ほどの見聞をもとに「経済単位発展史上韓国の地位」(1903～5) という論文を執筆し、発展段階説の立場から朝鮮の停滞と封建制の欠如を論じた。ロシアではなく封建制を経た日本こそが「朝鮮を同化して進歩に導く命運と義務がある」というのがその政策論的な結論であった。日本の朝鮮支配を合理化したこの議論は、後に「停滞論」と呼ばれて日本人の朝鮮観に大きな影響を与えた。これも一つの地域研究のあり方である。自らのうのぼれ鏡のための他地域研究。これを今日「日本型オリエンタリズム」という。日本はこの百年以上にわたって、長い間西欧コンプレックスにとらわれてきた。理想化された西欧市民社会への憧憬とその裏返しの遅れたアジア・アフリカへの蔑視、もしくは同情と哀れみ。このような知と言説の構造は、ヨーロッパ語を通した学習中心の大学の社会科学のあり方や知識人の心性とも無縁ではない。侵略と支配に奉仕するための社会科学ではなく、主観的にも客観的にも連帯と友情のための地域研究とはいかにあるべきか。曲がりなりにも教養教育で地域研究としての朝鮮文化という科目を10年近く担当してきた自負は、少なくとも自分の研究はそのような異文化を尊重できる市民を育てる教育に役立っているはずだというものであった。この度の教養部改組で経済学部のスタッフとして迎え入れられ、いよいよ今年から経済政策学講座の環日本海地域論を担当することになった。そもそも環日本海という地域が成り立つのかという事からはじめて、朝鮮のことだけではすまない、ロシアや中国のことも勉強しなければならないだろうと思っている。しかしそれ以上に、隣人としての朝鮮半島における民族の統一、現実には南北両国家の統一という課題が目前に迫っている今日、長い歴史の間で常に悪しき隣人として意識されている日本人と日本の国家がいかに振る舞い、いかに振る舞ってはいけないかを、まさに日々問われているような気がする。そのような課題を意識しながら、過去の地域研究のあり方に常に自覚的であること。地域研究の恐さとおもしろさと題したゆえんである。蛇足ながらウェーバーの「プロテスタンティズム」の論文初出年と福田の「韓国の地位」論文掲載年はほぼ同時代である。

(金沢大学経済学部教授)